

「松島紀行」

大阪府立中央図書館

小笠原 弘之

大阪府立中之島図書館

山田 瑞穂

佐藤 敏江

高萩 綾子

爰にひとりの翁あり。身はいやくて四の民にもましらす、形は釈義に似て精舎にも住せず。林下に心をおきなから、塵裏に恥るしれものなり。つくはの道を道として、其ともからを友とす。四方の国々に嘯き所々にあそふ。東の方に心さしける時はやよひの初になん。本より住所求るにしもあらず。身をうき草のさそはるゝ方もなくて、心の行所に任せて春過秋来り。すてに文月廿日余日には、陸奥なこそその関を越て何かしの城下にいたる。此地西北にめぐりて、みな山なり。山すくよかならずして茂林青々たり。南に川あり。日夜東流して葵海にのそめは、東吳万里の船を繋、ゆをひかなる壯観なり。なこそその関、さはこの御湯、野田の玉川、緒絶橋、小川の橋、岩城山、此城外一二里の間にあり。をのく興ある所なり。玉川の水上に山庄の地有。菊を東籬めく南山の柁時を多たり。茸かり、川逍遙のたよりよき所なり。海のつらには苦屋かたの休所あり。大河も垣根二なかれ、湖水門外にめくる。子陵かいとなみにことよせて日を暮し、夜を明す。さなから仙客にことならずして、斧柄も朽ぬへし。

世をつくす我所かせ下紅葉

やうく八月、いさよひの比、千賀のしほかまちかきにはあらねと、都よりたに思ひ立へきをとよほしおふせて、同行をさへたかひにければ、道すから口すさむ。つぶやきて相馬中村を過て名取川、仙臺河、宮城か原の萩の盛いとさらなり。

宮城野を都のさかは花もなし

けふ十六日にや。また朝霧のほとに彼浦につきぬ。聞ならく六十余國の中々「に」詞に絶たり。川原のおとゝの昔も思ひ出られて、彼朝臣のこゝによらなん。なかめし蜚の小舟に乗て霧の籬の嶋かくれなくさしめくる。

浦山はいつくはあれとあま小舟かゝる所のあきの夕きり

塩竈や色ある月のうす煙

嶋かくすそれも霧の籬哉

扱、松嶋のたゝすまひ、やうかはりて、いたりふかきくまく見所おゝし。其夜はあまの苦屋にやとりて、

松嶋の夕へを秋のゆふへかな

月にかせ雄嶋の蟹の袖枕

明れは廿二日、空よくはれたり。また一葉にさをさして、をしまか磯、何某の嶋、残る方なし。よのつねの松の枝さし、岩のかたち、すへて言つくすへうもあらず。天飛鷹の声友よふ衝、さなから画図にむかふかことく、又詩聲を聞に似たり。やうく遠寺の鐘夕照をとろかし、遠浦帰帆もよほしかほなり。興に乗して来り。今日のたのしみ何にたとへん。跡の白波帰さは信夫の郡、二本の松、三春など言渡をへて、又岩城に帰り入ぬ。爰に又日比有て、長月の末に、

千々の秋よしやわかれば命哉

有明のつれなやたつた独旅

笑草をさへとめ置て、此度ハ白川の関にかゝりて、

遠く聞秋風わくる関路哉

下野国あしのと言所に、西行法師のよめる清水なかるく柳あり。

時雨にも少時とてこそ柳陰

かせや時雨なすの笹原露もなし

神無月の初、武蔵国にいたりぬ。爰にも知人おほく、こなたかなた一日二日と過ゆくに、雪霽かちなる空には老の出たちもいかにそや。春待つてなど言に留られて、師走の空にもなりぬ。京の人来りあひて、物かたりつゐてに、やつかれかむすめ、文月の比うせにけるとふらひを言に、不計聞つけたる心地ともかくもおもひわかす。今迄つけさりし故郷人も覺束なく、夢にやあらん、偽にもやと萬におもひわくかたなし。いにし春、老の別をこそ心ほそう思ひしに、かくさかさま成愁にしつむハかへすくつれなき命にこそ。

かゝりける別れをしらて老か身の命はかりをおもひつるかな

からうして故郷のふみに、

あわれこのわかれを言もなくさめん人さへ旅におもふかなしさ

忍草の生ひたつを見ても、子はまさる覽とこそおもひやらるゝ。やみのうつゝは夢かとのみ、なみたに暮ゆく年の名残さへいとかなし。

打捨てこはなそ老の歳の暮

かくて年改り、明ゆく空、四方のけしきもいちしるし。天か下しろしめす御所なれば、御門くよりはしめ、民の家あまで松たてわたしたる。千年のかけにさし出へきならねと、世をいわひ、身をことたつ日なれば、

御代の春四方の本たつ東かな

むさし野や今朝は霞もなひく世の行末遠き春は来にけり

世間のとかに、花やかなる月日にそへても、心のやみはるゝかたなし。旅の空にしあれは、一僧を供養する事もなし。たゞ身つから念珠の序につゞり出たる句、百の数に及ぶ。ねかわくはあさかなる言種ながら唱る御名の力にひかれて、五障の罪をかるめ、九品の花ひらくるたよりともなれかしとなん、佛前にさゞけ奉るものならし。

宗因

春やあらぬさめぬや去年の秋の夢

露になれにし月かすむ袖

草枕旅に花咲花ちりて

跡ははるけき山路くらしつ

絶々の人けも里も見ゆる野に

舟わたすらし竹ふかきかけ

川口の涼しさそふる日は入て

雨落ると水上のくも

一しきり風に木葉や乱るらん

遠きもちかくなれる鹿の音

かりねする麓の庵の月更て

鳴子引手の寒き小山田

露霜の行かふ空やはやからん

あはれいつくをかりの古郷

うきはたゞ春ともしらぬ左遷に

うらゝなるにもあらいその波

霞分いそく清見か関くれて

駒つからかし歩よりそする

袖をもる雪打はらふ度々々に

庭につみ置かけの山柴

身をはかつ賤か住居にならして

なにかうき世に又はかへらん

ねかふこそ往生るへき御国なれ

あさはかならぬ契たかはし
見そめしはふりわけ髪の末かけて
床しや深き窓のよそをひ
ねぬる夜の夢にも梅やかほるらん
やゝ明かたの園のはつ蝶
小雨せし名残は露のあたゝかに
打出る野の春は珍らし
音たちて氷のひまのさゝれ水
里はなれなる沢田あらすな
呉竹のふしみの道は草ふかみ
山松の葉を落すしたかせ
月影や雪にまかへて鳴からず
枕わひしく明すふゆの夜
片敷もなこやかならぬ麻被
うつゝにつらきいにしへの夢
君かいにし朝の雲のなかめして
空も泪の雨やそふらし
限有時をかなしむ花さかり
したふ佛はけふの二月
墨染の夕の山やうす霞
繪によく似たる春を見る峰
かさなれる岩ほそひへし瀧落て
上つせ清き此よし野川
夏はたゝなかれていつら夕被
月にはれのく天の八重雲
七夕にかせる扇の風たちて
露更る夜のこすおろしてよ
来ぬ人にむしの音さへやよはるらし
しのひしものを恋草の色
落としても覚す袖の泪にて

つれくときく須磨の浦波
我ことや友まとはして鳴千鳥
分る芦原の夜道わひしき
あかつきの煙となして帰る野に
いくさの跡は民のやもなし
時しらぬ田は草村にうつもれて
またさし柳枝も茂らす
たゝへぬる水も少き池の面
霧の籬の見入寂しき
誰ふるす舎里に月の残る覽
千度礎の声そうらむる
秋更る風につけても物おもひ
もろき栴にまさる色人
一時雨そのま計のうき別
いつちゆきての道の山さと
石はしる清水をむすふ門前
夕日かくれにおそき蟬の音
苧しほにそよめく麦の秋見えて
かよふ野守か栖しるしも
跡はたゝ有と計の三の道
御法にしかしもろこしの文
同しくは世をいとふ身を苔衣
おもふ心の奥の山すみ
花まちて幾有明の寢覚せん
ゆふつけ鳥やさそふうくひす
いとはやも関の此方に年越て
都の人のけはひのとけし
道すから旅をなくさめよむ歌に
野山の夕浦のあけほの
秋にうつる心や春をわするらん

子あるちきりもよそけ身にしむ
しれものゝことかたらひて露泪
立らるゝ名を月も憐め

なかれ木と成し行衛をいかゝせん

谷川ひゝく五月雨のころ

雲ふかき山ほとゝきす跡絶て

あふちましりの林しけしも

里ひたる社を祝ふかたはらに

引をうしとや野飼捨けん

をのかとち童遊ぶに打みたれ

夜半にまろはす雪そえならぬ

朝速ひらく戸さしの寒き日に

おもむく道の末の根風

こくふねは比良の湊を目にかけて

波のうへもや暮残るらん

花の色を俤にして行水に

おしむ弥生の日数ほとなき

干時寛文三年臘月五日書也

おわりに

大阪府立中央・中之島両館では、近世から明治にかけての資料を所蔵しており、仕事の中でそうした資料を扱う必要がある事から、他機関からの出向職員を含む職員有志による勉強会を開催、テキストは中之島図書館所蔵の大阪に関する資料とし、近世の資料の解読と共に、大阪や古典籍に関する知識の獲得をめざしている。長年続けているが、その時々により構成メンバーが入れ替わっているため、今回は二段階に班分けし、大阪に関する資料二点をとりあげる事とした。